宮の上墳墓

宮の上遺跡発掘調査報告書

1994年

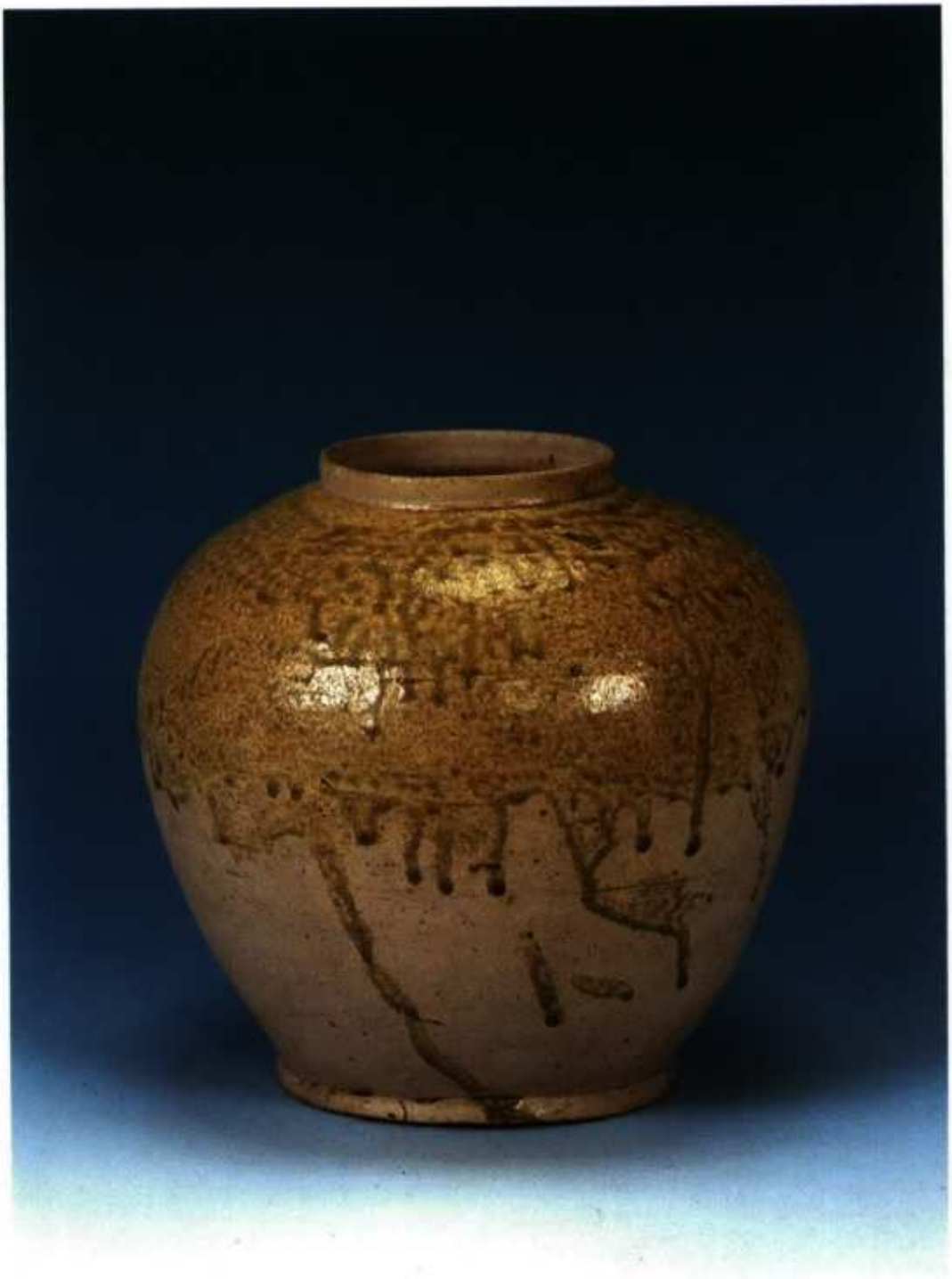
長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会

宮の上墳墓

宮の上遺跡発掘調査報告書

1994年

長野県上伊那郡南箕輪村教育委員会



序

「宮の上遺跡出土蔵骨壷」の発見は、平成元年12月、本村南殿の小森源一氏が畑の梅の木の植え替えをしていて、土中の石組みに掘り当たったことが契機となっています。この梅畑は、南殿の「殿村八幡宮」の森の西側で南に傾斜した日当たりのよい所にあり、辺り一帯は「宮の上遺跡」と呼ばれ、縄文から古墳・平安時代までの出土品の多いところであります。

この「蔵骨壷」の発見の状況については、本文の発掘の経緯に記されているように、貴重な埋蔵文化財ではないかと直感された小森氏をはじめ、報告を受けて的確な保護処置をしてくださった関係者の皆さんのおかげであります。

村教育委員会は県文化課と協議のうえ、箕輪町郷土博物館の主任学芸員柴登巳夫氏、学芸員赤松茂氏を調査担当者ならび調査員にお願いし、小森氏および村文化財専門委員の協力を得て、同年12月21日に発掘をしました。その後、平成２年３月に「発掘調査概報」を柴氏に、４年３月に「壷内に埋納された人骨について」を信州大学医学部の西沢寿晃氏に、それぞれ執筆いただきました。また、県文化課指導主事の小平和夫氏（当時辰野西小学校勤務）からは蔵骨壷を文化庁に持参し、文化財担当官から直接に鑑定を受け、その結果を報告文にまとめていただきました。

この「蔵骨壷」は出土状況が明らかで学術研究上の価値が高く、しかも平安中期の灰釉短頸壷が完全な形で出土している例は極めて稀で、文化財としての価値を高く評価されているものです。ここに報告書を発刊し、多くの方々の研究に資することができますことをたいへん嬉しく思います。関係されたみなさんに心から感謝を申し上げ、発刊の言葉とします。

南箕輪村教育委員会

教育長　杉　澤　　崇

例　　言

1　本書は長野県上伊那郡南箕輪村５３７８－１番地に所在する宮の上遺跡内での火葬蔵骨器発掘調査報告書である。

2　調査は県文化課の指導により箕輪町郷土博物館の協力を得て南箕輪村教育委員会がおこなったものである。

3　本書の作成は以下のように分担した。

　　挿図作成　　小平和夫・友松諭

　　写真撮影　　征矢写真機材部、スタジオ部

　　図版作成　　友松諭

4　縮尺は以下のとおりに統一した。

　　遺　構　図　　１：２０

　　遺物実測図　　１：３

5　本書の執筆は小平和夫（県文化課指導主事）、柴登巳夫（箕輪町郷土博物館学芸員）がおこなった。

6　土器の復元は福沢幸一氏にお願いした。

7　発掘調査及び報告書の作成にあたって下記の機関並びに個人の方々に御指導・御協力をいただいた。感謝申し上げる。

　　○機関　　長野県教育委員会文化課・箕輪町教育委員会

　　文化庁文化財保護部美術工芸課

　　○個人　　小森源一（地主）・西沢寿晃（信州大学医学部）

8　調査・整理にあたっての出土遺物及び図版類は南箕輪村教育委員会で保管している。広く活用されたい。

本 文 目 次

序
例　言
目　次
第Ⅰ章　遺跡の立地環境……1
第1節　位　置……1
第2節　自然環境……2
第3節　歴史的環境……4
第Ⅱ章　調査の経緯
1．調査に至る経過……6
2．調査の経過……6
3．調査組織……7
第Ⅲ章　調査結果……8
1．遺　構……8
2．遺　物……10
（1）土　器……10
（2）人　骨……12
第Ⅳ章　まとめ……14
1．宮ノ上墳墓の時期……14
2．長野県内における奈良平安時代の墳墓……17
引用参考文献
図　版

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　地形地質分布図…… 3
第３図　周辺遺跡分布図…… 5
第４図　周辺地形図…… 8
第５図　遺構上面配石図…… 9
第６図　蔵骨器位置図…… 9
第７図　遺構断面図…… 9
第８図　出土土器実測図……11
第９図　上伊那地方における奈良時代から平安時代前期の土器……16
第１０図　伊那谷における古代の墳墓……20

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 4
第２表　長野県内（中・南信地域）における奈良・平安時代の墳墓……22

図　版　目　次

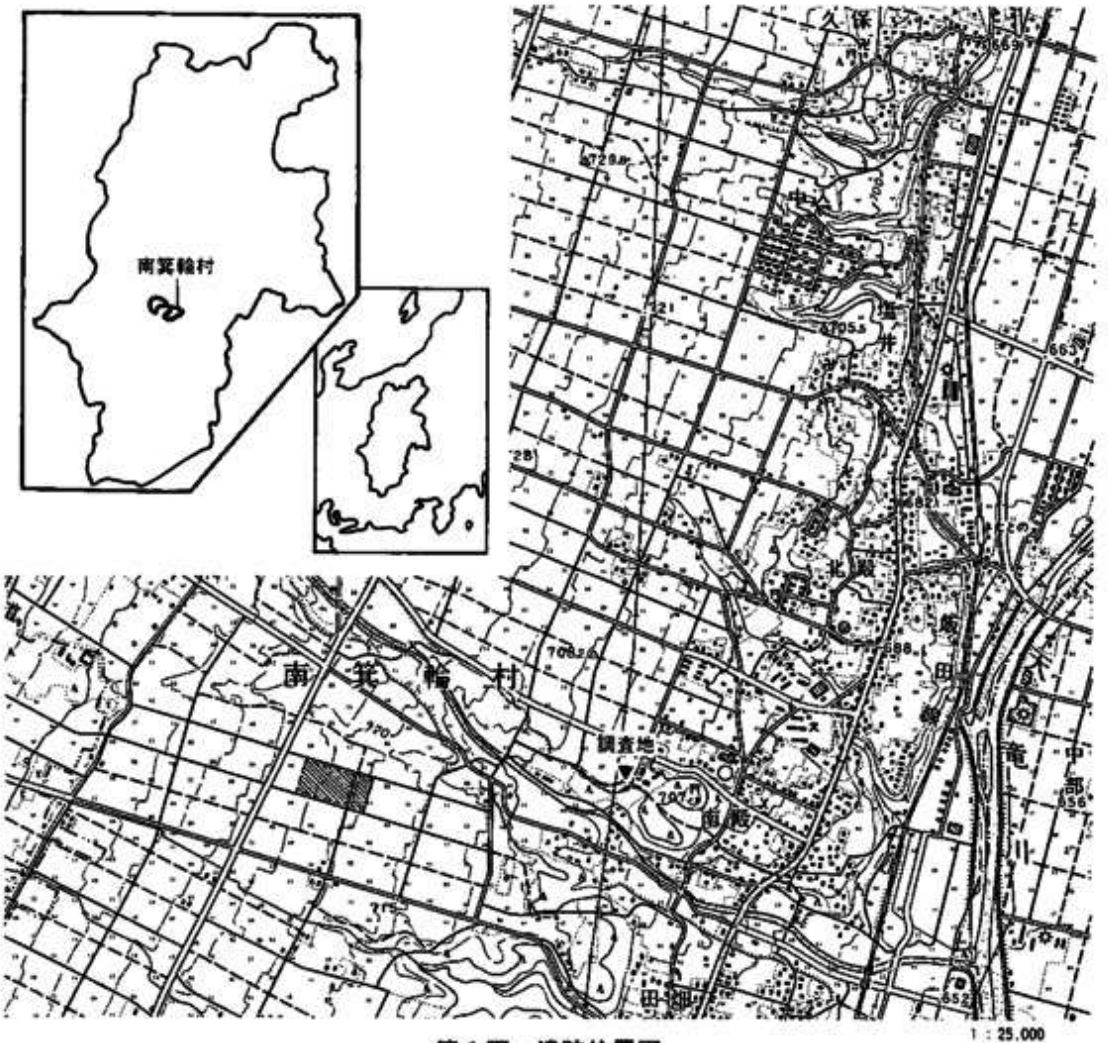
図版１　１.調査地遠景・２.調査地近景
図版２　３.遺構上部配石状況・４.石組み状況
図版３　５.蔵骨器埋設状況１・６.蔵骨器埋設状況２
図版４　７.蔵骨器埋設状況３・８.蔵骨器埋設状況４
図版５　９.遺構底部配石状況・10.掘り形底面状況
図版６　11.灰釉陶器短頸壺・12.灰釉陶器皿１・13.灰釉陶器皿２
図版７　14.蔵骨器埋納骨（一部）

第Ⅰ章　遺跡の立地環境

第1節　位　　置

宮の上遺跡は（蔵骨器出土地点）上伊那郡南箕輪村5378－1番地、役場の西方約300mに位置している。八幡社の西側（上）に位置しているところから「宮の上」の地名がつけられたと考えられる。大泉川は、源を大泉所山に発し、その両岸には何ケ所かの遺跡が見られる。

調査地は、大泉川左岸の傾斜地最上部近くであり、標高702mを示している。



第1図　遺跡位置図

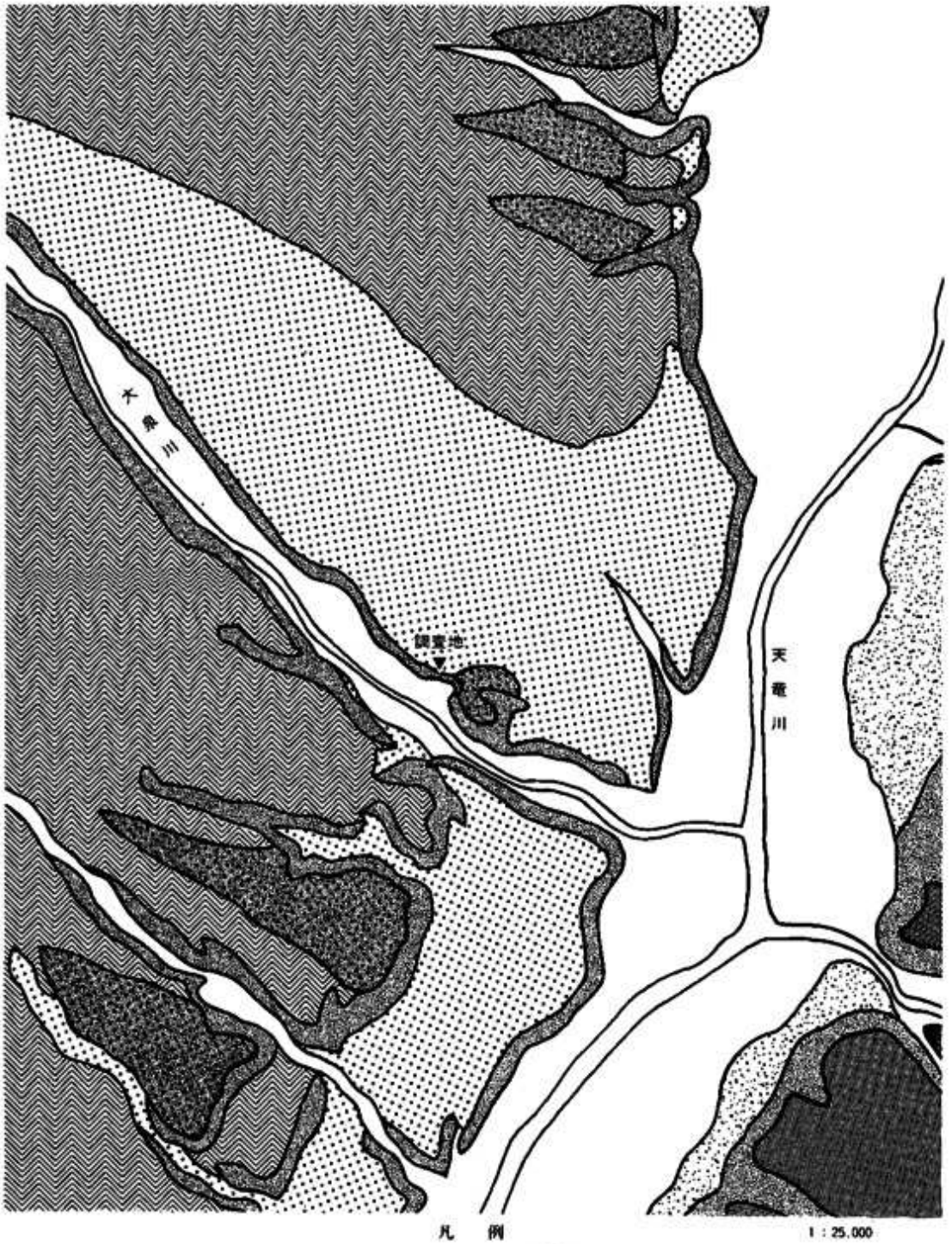
第２節　自然環境

南箕輪村は、北部伊那盆地の広く平坦な地域に位置し、天竜川に流入する大泉川・大清水川一部帯無川・小沢川等によって形成された扇状地面が主であり標高は700～900mに及んでいる。

地形は西方の山地、それに続く扇状地、最下部の天竜川沖積面となっている。扇状地は約２度のゆるやかな傾斜で、東流する河川を中心に水には恵まれた地域で、その他にも湧水や井戸による水が見られる。これ等の水は生活用水また水田に使用されている。河川は、流路が１０km前後の規模であるが、急な出水による氾濫が記録されている。

地質は、山地より運ばれた礫によってつくられた礫層が大部分でその他には、天竜川によって形成された礫層も観察されている。

航空写真１：5000



（天竜川上流域地質図より）

第２図　地形地質区分図

第３節　歴史的環境

考古学的な歴史的環境を考えると、南箕輪村の遺跡分布は、大きく二つに分けられる。一つは、国道153号線に沿った天竜川右岸段丘上にベルト状に並ぶ一群と、天竜川に流れ込む支流の大清水川・大泉川・鳥谷川等の両岸に分布する二つである。

他に、天竜川沖積面に位置する箕輪遺跡である。北隣りの箕輪町と地続きで大遺跡の一角を占めている。

同村において最も著名な遺跡は、神子柴遺跡であり、神子柴区大清水地区に位置する同遺跡は昭和33年に発見され、それまで数千年前と考えられていた上伊那の人類史を一挙に一万年の昔に引き上げる発見となった。出土した石器類は、いわゆる神子柴型と呼ばれる基準的なタイプに設定されている。

次に、調査地を包含する宮の上遺跡であるが、ここは以前から多くの遺物が収集されている場所であり、時代的にも複合し、縄文時代中期・後期の土器・石器類をはじめ、古墳・平安・中世に及ぶ遺物が見られるなかで、五鈴鏡は注目される遺物である。

また、古代・中世・近世に及ぶ歴史も豊富で、東山道の通過、諏訪社の御射山の神事、いくつかの城址の存在等多くの歴史を物語っている。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	時代						備考
			旧石	縄文	弥生	古墳	平安	中世	
1	宮ノ上	南殿		○			○		平成１年度調査
2	羽場	田畑		○					
3	田畑	田畑		○					
4	神子柴	神子柴	○	○			○		昭和33年度調査
5	秋葉神社	北殿		○	○				
6	荻河原	大泉		○					
7	大泉	大泉			○	○	○		
8	柴宮	北殿		○					
9	西垣外	北殿		○	○		○		
10	北垣外	北殿			○	○	○		平成２年度調査
11	東垣外	北殿			○	○			
12	垣外	塩ノ井		○					
13	塩ノ井	塩ノ井			○				
14	上人塚	塩ノ井		○			○		
15	内城	北殿		○		○			
16	天伯	塩ノ井		○	○	○	○		昭和42年度調査
17	山の神	塩ノ井		○	○				
18	箕輪	塩ノ井・久保 木下・三日町		○	○	○	○	○	昭和57年～平成４年度調査
19	向垣外	塩ノ井		○	○	○	○		
20	天王原	久保					○		
21	南垣外	久保		○	○				
22	久保下	久保				○			
23	丸山	久保		○	○	○			

❶宮ノ上　❷羽場　❸田畑　❹神子柴　❺秋葉神社
❻荻河原　❼大泉　❽柴宮　❾西垣外　❿北垣外
⓫東垣外　⓬垣外　⓭塩ノ井　⓮上人塚　⓯内城
⓰天伯　⓱山の神　⓲笄輪　⓳向垣外　⓴天王原
㉑南垣外　㉒久保下　㉓丸山

第3図　周囲遺跡分布図

第II章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

1989年（平成元年）南箕輪村南殿の小森源一氏は、自分の梅畑にて梅の木を植え替える為、作業を進めていたところ、土中の一ヶ所から石積みと、それに囲まれた壺を発見した。すぐに同区の村文化財専門委員清水一清氏に連絡をとる。清水氏は現場を確認した後、貴重なものと判断し村教育委員会事務局に連絡。教育委員会事務局は直ちに現場に赴き、小森源一氏に現状保管の依頼をお願いする。それまでの作業等で発見された出土遺物を収集し、事務局で保管した。引き続き長野県教育委員会文化課へ連絡し、今後の措置をどのようにしたらよいか指導を受ける。それにより、箕輪町郷土博物館学芸員柴登巳夫氏に発掘調査を依頼した。

１２月２１日午前９時より現場において調査についての協議を実施した後、発掘調査を行った。

第２節　調査の経過

現状を見ながら今迄の経過及び、保護のために行われたこと等について説明を受けた後調査の撮影と平面図を製作するところから始める。作業中偶然に発見された遺構であるが、発見者の適切な配慮によって、現場はあまり形を変えることなく残っており、蔵骨器埋葬状況を、ほぼ推定できるものと思われた。石積みの状況の平面図作製後、掘り込まれている土層状況と、石積みの状況を見るために半カット状に排土し横面から石積みを観察する。径90cm程の隅丸方形に掘られた落ち込みは、表土面から90cmの深さになっている。石積みの作図及び土層の調査後、石組みを上部から取り除き蔵骨器の配置状態を調査する。

外側の石は側壁に添っており、壁及び底面は敲いて調整している。掘り形の調査、積み石状況の調査後、石質及び自然環境等を記す。全体的な遺存状況がきわめて良好で、石組の状況も上部から力が加わっても骨壷が保護されるように配石してあり、その状況は今回の調査時まで、埋葬当時のままを保ったと考えられる。この地が大きく地形を変えることなく今日に至ったことは、きわめて幸運であり貴重な遺構を調査する機会となった。

第3節　調査組織

○現地調査時

・調査担当者　柴　登巳夫（箕輪町郷土博物館学芸員）

・調査員　赤松　茂（箕輪町郷土博物館学芸員）

・事務局　長谷部五郎（南箕輪村教育委員会教育長）

清水　千源（南箕輪村教育委員会教育次長）

藤沢　久人（南箕輪村教育委員会社会教育係長）

・調査協力者　小森　源一（地主）

南箕輪村文化財専門委員　伊藤亮平　唐沢　勇　倉田友雄

征矢義明　清水一清　日戸武彦

唐沢　実　原　輝夫

○報告書執筆時

・調査員　小平　和夫（県教育委員会文化課埋蔵文化財係指導主事）

柴　登巳夫（箕輪町郷土博物館学芸員）

・事務局　杉澤　崇（南箕輪村教育委員会教育長）

唐沢　謹男（南箕輪村教育委員会教育次長）

唐沢　由江（南箕輪村教育委員会社会教育係長）

友松　論（南箕輪村教育委員会学芸員）

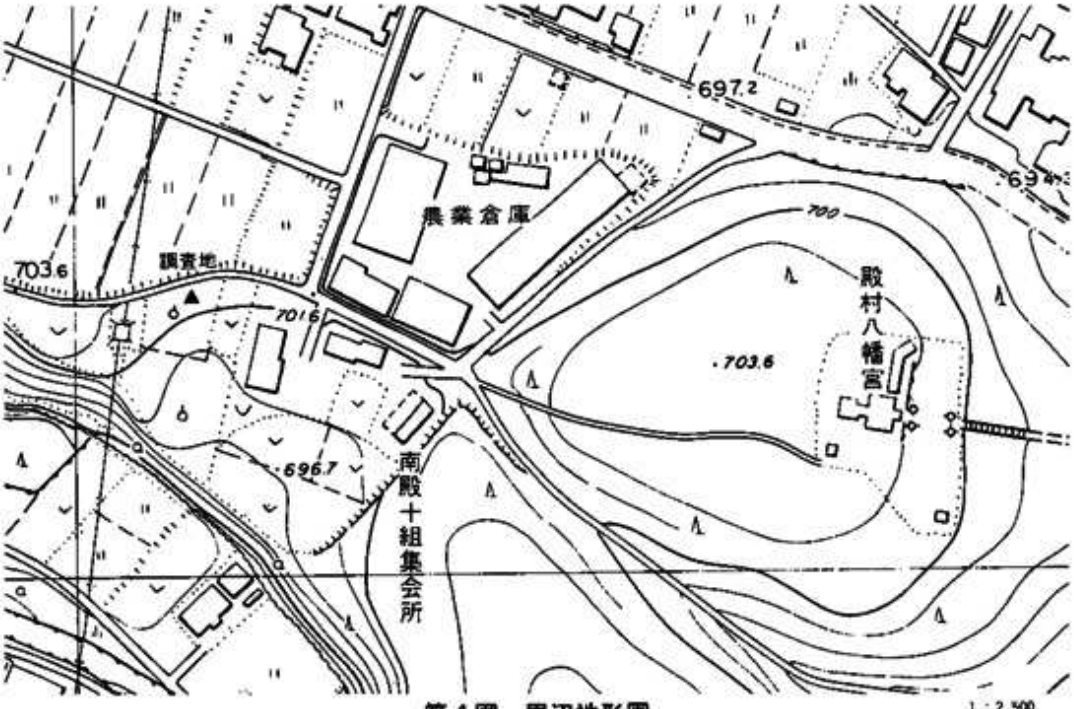
第Ⅲ章　調査結果

第1節　遺　構

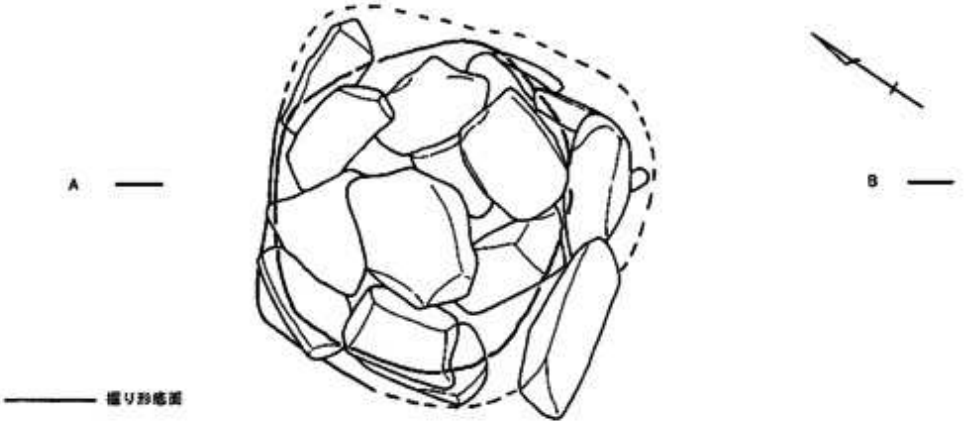
大泉川左岸段丘上の傾斜面最上部に位置している遺跡地は、発見者の適切な配慮によって、中心部の遺構は、ほぼ原形を保っていた。

積石の最上部から表土面までは20～30cmと推定されるが、第一層は最近の置土の部分が見られる。次に掘り形であるが、上面で径90cmの隅丸方形、底部は径80cmの隅丸方形を呈している。壁は直に近く、底面は、石の座りを考え、わずか凹凸が見られる。いずれも敲いて調整してある。積石には、ほぼ人頭大のものを用い、外側は平石を壁に付けて、立ててあるものも見られる。底から二段の石積みが行われ、二段目の中央には、やや大き目の平石が置かれ、この石の中央に壷が位置している。完形の壷の口縁部には坏を二枚重ねの状態で蓋がしてあり、壷の周囲は炭交じりの土で保護されている。外側から横積状に配石され、土を入れながら安定させて組んだ状況を推測することができる。石は5～6段に重ねられ、上部は比較的大き目な平石で蓋をする形になっている。これにより中心部に置かれた壷は確実に保護され、外からの影響を全く受けることなく今日に至ったのである。

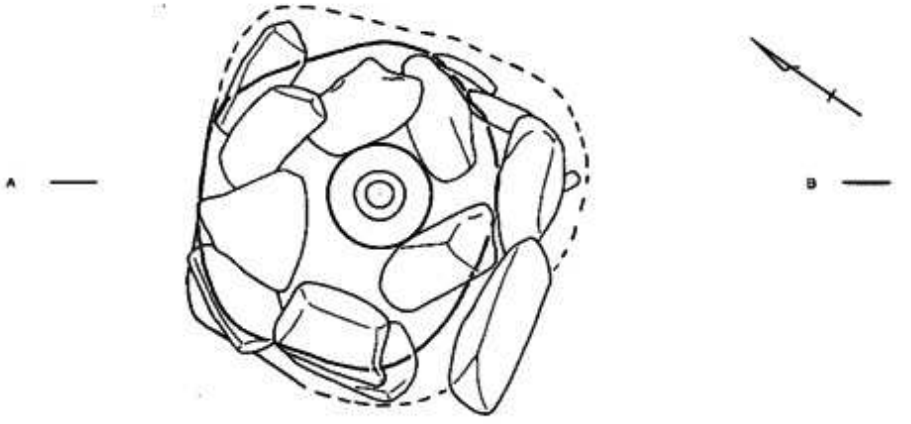
なお、石組に用いられた石は、総数47個を数え、それ等は、眼下の大泉川より運んだものと思われる。



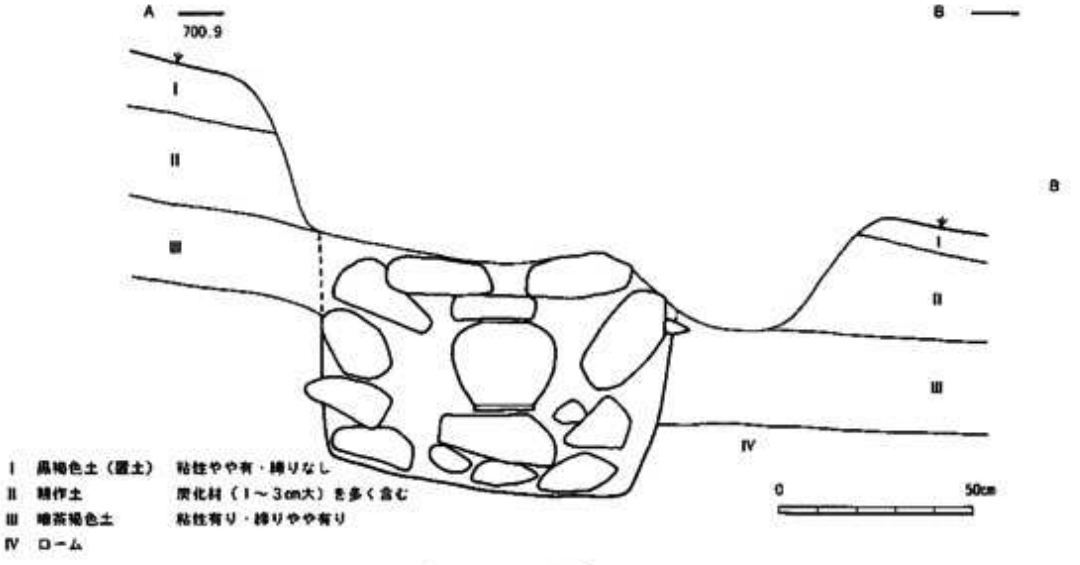
第4図　周辺地形図



第５図　遺構上面配石図



第６図　蔵骨器位置図



第７図　遺構断面図

第2節　遺　　物

（1）土　器（第8図）

遺物は、蔵骨器本体として使用された灰釉陶器短頸壷と、蔵骨器の蓋に転用された灰釉陶器皿2点。他に、火葬墓覆土中から出土した縄文土器数点がある。

遺構の記述のなかでも述べたが、火葬蔵骨器は3点からなり、石組の中央に3の灰釉陶器短頸壷が据えられ、灰釉陶器皿は短頸壷の上に2枚を重ね被せる形で出土した。1が上に、2がその下に重ねられていた。

1は、口径14.2cm・器高2.9cm・底径6.6cmを測る。体部は、弱く湾曲しながら口縁へと直線的に開き、口縁端部は玉縁状となる。体部内面は平坦で、施釉の及ばない中央付近に直径6cmの重ね焼痕が残る。底部外面から体部下半にかけて、左回りロクロ使用の回転ヘラ削りを施すが、削りの範囲は広くない。高台は、ヘラ削り後に貼付された、いわゆる三日月高台状であるが、高台外面の陵は明瞭でなく丸味をもち強く内湾する。高台調整時のロクロナデは、底部外面中央にまで及んでいる。施釉は、内外面ともに一筆の刷毛掛けで体部上半に行われている。釉は艶のない白色を呈する。

2は1に比し僅かに大振りで、口径14.5cm・器高3.3cm・底径6.8cmを測る。体部にやや弱い張りをもって低く開く形態で、口縁端部は折り曲げるように外反し、丸くおさめている。内面底部は扁平に近い。底部り貼り付けられた高台は、断面長方形状であるが、外にふんばるように強く開き、端部には平坦な面を作って内側の端面で接地する。体部にはロクロナデ痕が強く残る。底部外面から体部下半にかけて、回転ヘラ削りを施すがその範囲は狭い。ヘラ削り時のロクロは左回り回転である。釉は淡緑色の艶のある釉で、体部内面上半と外面にかかる。胎土は精良緻密で、灰白色を呈する。1～2mmの黒色粒子が含まれている。底部内面には施釉が及ばず、直径6mmの重ね焼痕が残る。内面、特に底部周辺は使用によってつるつるに摩耗している。

2が使用によると思われる内面の摩耗が著しいのに比べ、1は内面の摩耗はなく、未使用の可能性が高い。

3の短頸壷は、完形でひび割れなどはない。口径11.6cm・器高25.4cm・底径16.4cm・胴部最大径27.4cmを測る。全体のプロポーションはやや肩の張った、縦長の胴形で、一見して背の高い印象を受ける。

強く張った肩部から、垂直に立ち上がる口縁部は1.5cmと比較的短く、その端部はナデ調整で丸くおさめられている。肩部から下へ伸びる体部は、張りが弱く直線的で大きめの底部と相まって胴長の印象を与える。底部外縁には幅1cm、高さ9mmの高台が貼付されている。高台は外に強くふんばる形状で、内端で接地する。

体部は成形の後ヘラ削りで形を整え、ナデによる調整を行うが、体部に施された回転ヘラ削

りの範囲は広く、底部下半から肩部上半の口縁間近にまで及んでいる。ヘラ削り時のロクロの回転は左方向である。

釉は口縁部から肩部、体部に上半にかけて刷毛掛けされ、淡緑色の釉が胴部下半にまで一部で流下している。内面には施釉されていない。底部外面にも釉が認められるが、意図的な施釉ではないと考えられる。胎土は、白色に近い灰白色で、精良、緻密。焼成も良好である。

皿に見られる、口縁を玉縁状におさめ、あるいは強く外反させる形態、三日月状の高台、刷毛掛けによる施釉などの形態的、技法的な特徴は東濃地方における光ヶ丘１号窯式の型式的特徴である。また、挟雑物の少ない緻密な灰白色の胎土も、これらが、東濃産であることを物語っている。短頸壺も、肩の張る胴長の形状、刷毛掛けによる施釉など、皿同様に光ヶ丘１号窯式に属するものと考えられる。

第８図　出土土器実測図

（2） 人 骨

宮の上遺跡出土の骨壷に埋納された人骨について

信州大学医学部

第二解剖学教室　西　沢　寿　晃

(1)人骨の埋納状況

骨壷内の人骨は、上・中・下部にわけて観察したが、各骨が全く混在する状態で、火葬に付した後の１固体分を一括して採り上げ、埋納したものと推察される。ただし、下方にやや長骨の大型片が多い傾向がうかがえる。頭骨もおおむね分散している。

骨はことごとく細片状となり、表面から内部まで黒く焦げた程度から、銀ねずみ色や青灰色・白色を呈する色調が含まれている。これは全身的な骨の位置や、被った火力の相違による結果と見られる。また、焼骨に特有な骨の収縮と同時に亀裂や捻転が生じ、著しい変形と破砕のため、ほとんど原形を止めていない。

全身の骨格中、ほとんどの部位の骨が残されているが、通常の火葬骨にみられる長骨などの大型骨が僅少である傾向が指摘され、埋納に際しての損壊の結果とも推定できよう。

(2)骨の形状

部位の認定できた骨の形状について概要を記す。

頭蓋骨：ほとんどが薄い板状の脳室部分の骨片で、量的にも多い。

後頭骨：後頭隆起の周辺部が複数の細片。人字縫合が離脱している。骨壁は比較的薄い。

側頭骨：両側の下顎窩の部分が認められ、深さはほぼ通常である。頬骨弓の一部も残存。

上顎骨：左口蓋突起の一部で、中切歯から第２大臼歯間の歯槽が残る。一部の歯槽縁は吸収によりＶ字状に陥入する。

下顎骨：骨体（左）の小部分には第３大臼歯の歯槽が残る。また、臼歯が１本植立する部分もある。

歯　：切歯８本、臼歯４本が残存する。本来のエナメル質を含め硬質の歯は火力に弱く残存は稀であるが、本例では歯根も共にほぼ完存している。色調は灰色を呈する。切歯では共通して切縁が咬耗によりほとんど消失し、歯頸線近くまで及んでいる。歯髄腔が線状に露出する。

脊椎骨：椎体・椎弓の小部分が数多く残されている。椎体の脆い海綿密部分も良く収集されている。軸椎が原形に近く保存されている。

上腕骨：両側と見られる骨頭部分の一部が認められる。

橈　骨：両側の遠位関節部や骨体の一部が残る。

寛　骨：両側の寛骨臼の一部が残るが、大きさは通常であろうか。恥骨の小部分なども認められる。

大腿骨：両側の骨頭部分が残る。遠位関節部も部分的に残されている。骨体の細片は多く、骨壁はさほど厚くない。

腓　骨：骨体中央の小部分。

距骨・踵骨（左・左）：それぞれの一部分が認められる。

指　骨：中手骨・基節骨または中足骨・基節骨の主として底部や頭部が数多く残存する。手・足根骨もわずかながら残る。

その他、各部位に帰属する細片は量的に多い。ただし、長大な骨の破片はさほど多くなく、壺中への埋納に伴い二次的に破砕された理由も推考される。

(3)結　語

骨壺内の人骨は火葬に付されて細片状となった１個体分の焼骨である。壺の下部にやや大形の長骨片が多い傾向もあるが、頭蓋骨も含めて他の骨片は、埋納後の集積で混在する状態である。頭部の細片や脊椎骨、指骨など微細な骨片も保存され、かなり丁寧に集骨がなされたものと考えられる。

火熱により骨の原型はほとんど消失し、骨の形質から判断される年齢・性別などの内容は不明である。しかし断片的な観察では骨の部位による強壮で男性的な形質はみられない。女性人骨の可能性はあるが、まったく速断できない。ただし、歯の咬耗の程度は、切歯の場合に限りかなり進行がいちじるしく、熟年以降の年齢が推定される。

第Ⅳ章　ま　と　め

第１節　宮の上墳墓の時期

ここでは、上伊那における奈良時代から平安時代の土器について概観し、宮の上墳墓の時間的位置を検討し、加えて宮の上墳墓が営まれた時期の上伊那地方における集落の状況の一端に触れてみたい。

上伊那地方の奈良時代から平安時代前半にかけての土器（食器）の変化は、概ね第９図にしめした６段階で理解できる。詳細は別稿に譲るが、土器の種類では須恵器主体から、黒色土器Ａ主体の段階を経て、土師器・灰釉陶器主体へと移行する。この間の変化は、須恵器杯Ａの型式的変化を機軸としてとらえられる。すなわち、形態的には底径が大きく体部が深く立ち上がる形態から、底径が小さく外反の強い形態へ。また、技法的には回転ヘラ切りから回転糸切りへという変化である。そして、この変化は、大きくは杯Ｂに代表されるいわゆる「律令的食器群」から椀・皿を中心とした「磁器指向の食器群」への変化としてもとらえられるのである。鳥居田１１号住段階を８世紀前半に、中道23号住段階を８世紀末から９世紀初めに、山本田代１号住段階を９世紀後半におきたい。

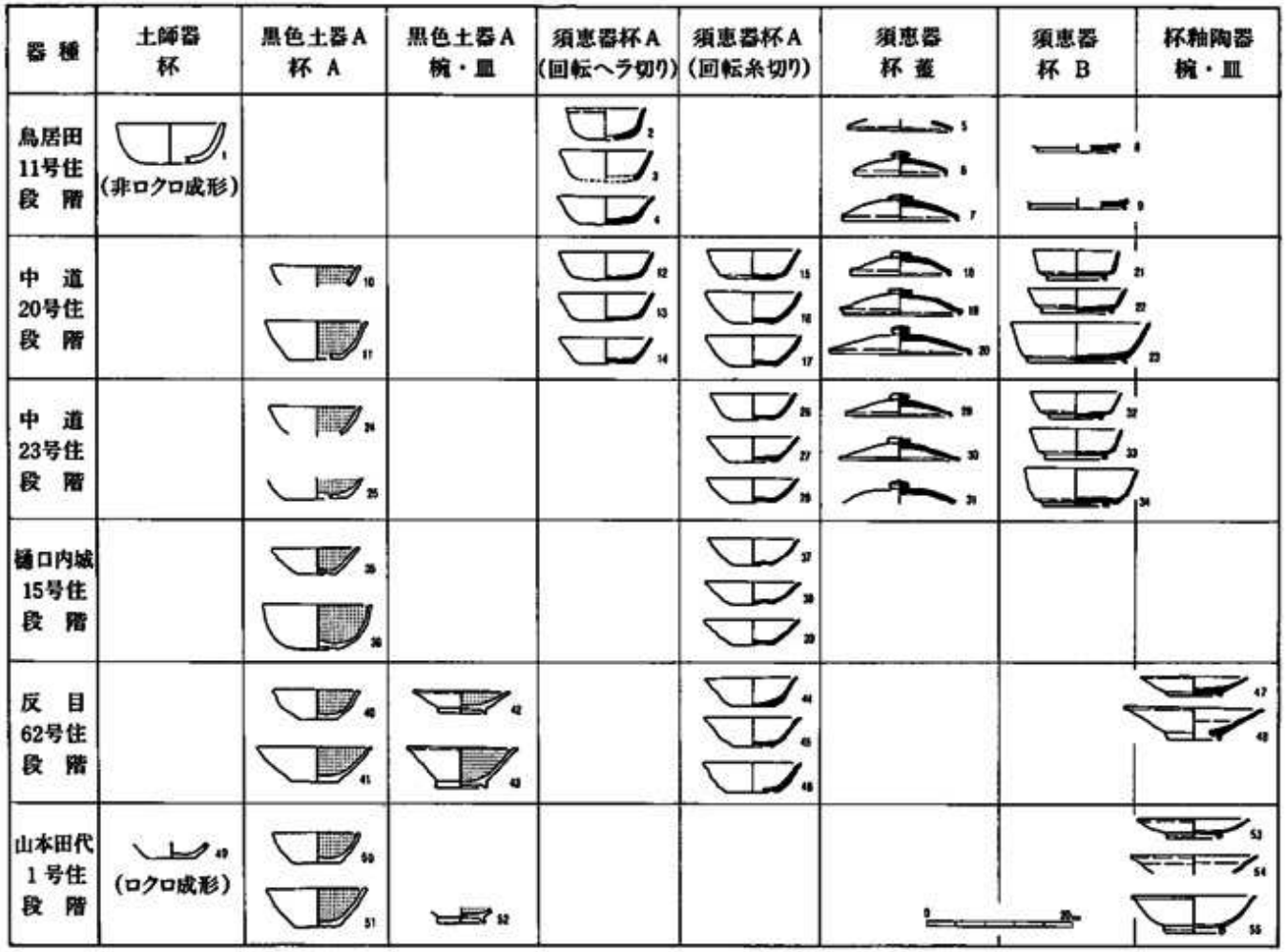
これに続く、平安時代中葉から後半にかけての上伊那における土器様相の変化については、さらに資料の増加を待って検討したいが、松本平の状況や原明芳の整理から、辰野町沢入口遺跡１号住居址の土器群を10世紀初頭に、沢入口遺跡２号住居址の土器群を10世紀後半に、伊那市月見松遺跡68、69号住居址の土器群を11世紀前半に、駒ヶ根市反目125号住居址の土器を11世紀中葉から後半に置くことができると考えている。

宮の上墳墓出土土器は山本田代１号住段階にあたると考えられるが、この段階についてみてみたい。この段階では、食器のなかで須恵器はすでに消滅しており、食器は黒土土器Ａと灰釉陶器、それに須恵器に代わって出現したロクロ調整の土師器で構成されるようになる。この土師器は、これ以降平安時代末まで灰釉陶器とともに食器の主体を占めることとなる。器種は、杯Ａ（黒色土器Ａ・土師器）、椀・皿（黒色土器Ａ・灰釉陶器）で構成される。この段階に伴う灰釉陶器は、食器では椀・皿・段皿・耳皿など、貯蔵具では長頸壺・短頸壺・小瓶等で、量的にも非常に多く、伊那谷においてはもはや食器の主体を灰釉陶器が占めているといっても過言でない状況である。これらは、椀・皿で口縁を玉縁状に外反させ、高台を三日月状に仕上げ、施釉をハケ塗りで行う光ヶ丘１号窯式に属するもので、緻密で白色を呈する胎土から東濃産製品と考えられるものがほとんどである。光ヶ丘１号窯式の灰釉陶器の他の消費地での動向を勘案すれば、この段階は９世紀後半に置かれよう。

次に、この山本田代１号住段階の土器をもつ時期の集落の様相について触れておきたい。こ

の段階は、奈良平安時代のなかで上伊那において最も多くの住居址が確認されており、集落が広範囲に拡散した段階といえる。箕輪町の中道遺跡や駒ケ根市の反目遺跡など奈良時代からの拠点的集落で継続するのは勿論のこと、古墳時代以来奈良時代においても集落域とならなかった河岸段丘上や山麓部の傾斜地、山間の小平坦地、また、田切地形の低地部にまで集落が広がりを見せる。そして、山本田代遺跡、反目遺跡等の分析によれば、この段階の集落は、大型竪穴住居址を核としてそれに付随する小型の住居址と掘立柱建物址で構成される建物群が集落を形作ることが多い。そして大型住居址は多量の土器と、農具・工具・武器などの鉄製品、墨書土器を集中し、鍛冶などの手工業をも管理する集落のコントロールタワーの存在を想定させる。9世紀中頃から後半にかけての集落の拡散と、このような集落構造の形成は、おそらく律令収奪により、次第に没落した農民層＝「小型住居址」と、それらを吸収し新しい村の有力者となった富豪層＝「大型住居址・掘立柱建物址」という図式でとらえられるのではなかろうか。

このような集落の状況のなかで、宮の上墳墓は営まれた。



第9図　上伊那における奈良時代から平安時代前半の土器

第２節　長野県内における奈良平安時代の墳墓

次に、長野県内における奈良・平安時代の墳墓について若干の整理を行い小結としたい。

長野県内の奈良・平安時代の墳墓を扱ったものには、すでにいくつもの優れた論稿がある。古くは藤森栄一の論稿があり、最近では遮那藤麻呂が火葬墓について集成と整理を行い、桐原健、原明芳は土壙墓について考察を行っている。ここではまず、それらの成果に学びつつ、奈良・平安時代の長野県における墓制の大きな流れについて整理してみたい。

長野県内、ここでは特に中南信地域の奈良・平安時代の墳墓について管見したものについて整理してみた。（第２表）

奈良・平安時代の墳墓は、大きく土壙墓と火葬墓に分けられる。火葬墓には、蔵骨器のない火葬墓、土器蔵骨器の火葬墓、有機質の蔵骨器の火葬墓などがある。また、土壙墓とされるものも、規模や形態が多様で、かつ骨片が残存することのほうが稀で、多くの土坑のなかでどれが墓として機能していたかを確定することは困難な場合が多い。ここでは、僅かでも骨片が残っていたもの、等身大以上の土坑で副葬品と思われる遺物が出土したもの、棺の存在が想定できるようなもの等を根拠として土壙墓として把握した。

さて、これを整理したものが第10図である。

まず、伝統的埋葬形態である土壙墓についてみたい。土壙墓は、奈良時代から平安時代全般を通して存在する。時期の知れるものでは８世紀代２例、９世紀代７例、10世紀代７例、11世紀代13例を数える。長方形あるいは長楕円形で長軸規模２メートル以上のいわば定形的なものは、９世紀後半から例が急激に増え、10世紀・11世紀をとおして増加する。明らかに大棺墓と想定できるものも何例かある。また、副葬品は、遺構により若干の差はあるものの、杯、椀、皿などの食器類と、長頸壺あるいはミニチュアの甕などの組み合わせによる土器の副葬を基本とし、それに鏡鑑、鉄鏃、紡錘車などの日常用具を加えるのが一定の形となり、この形式を整えるのは９世紀後半である。土壙墓の営まれる場所についてみれば、集落周辺部や、台地上に営まれることもあるが、各時期を通して集落内に置かれることが多く、集落からまったく隔絶した墓地に土壙墓を営むことはないようである。副葬品の土器量の多寡や内容の差異は、恐らく被葬者の階層をものがたるのであろう。

次に、火葬墓は火葬人骨を伴った遺構をさすが、土器蔵骨器と蔵骨器を確かめられないものの２者がある。土器・蔵骨器を伴わないものでは、素掘りの土坑と石組のものがあるが、石組のものについてはかならずしもその実態は明らかでない。素掘りの火葬墓は、規模や形状は様々で、火葬地が他にあり焼骨を集めて埋葬したと考えられるもの、火葬地を墓壙としたものなど多様である。県内他地域の例をみればおそらく８世紀前半から出現し、平安時代を通して存在したと考えられるが土壙墓にくらべ少ない。

岡谷市大久保Ｂ遺跡の例は、石室内に八花鏡とともに火葬骨を埋納したものである。横穴式

石室の系譜上にあると思われる石室と、火葬墓の両形態を合せ持った墳墓として注目される。八花鏡の鋳造時期等から８世紀代の所産と考えられている。集落とはかけ離れた位置に墓域を成している。

次に、火葬蔵骨器についてみたい。確実に焼骨を伴った蔵骨器は、第２表にあげた７例であり、発掘調査により出土状態が記録されたものは、本例と吉田川遺跡の例のみである。このうち新井原例は、宮の上墳墓例同様に、灰釉陶器短頸壺を蔵骨器として、須恵器と黒色土器Ａの杯Ａを蓋に転用していた。短頸壺は、宮の上墳墓のものより胴部最大幅が高い位置にある形態で、形式的にこれよりやや先行するものである。また、蓋に転用されていた須恵器と黒色土器Ａの杯Ａも樋口内域15号住段階から反目62号住段階に当たり、９世紀中葉の年代が与えられよう。岡谷市金山東遺跡の例は、灰釉陶器長頸壺、小瓶、椀ともに光ヶ丘１号窯式のものであり本遺跡例とほぼ同じ時期と考えられる。伴出した隆平永寶の初鋳が796年であることもこれと矛盾しない。箕輪町の山麓部から出土した、須恵器の横瓶、短頸壺を蔵骨器とした３例も、土器の形態から９世紀代の所産と考えられよう。吉田川西遺跡ＳＭ０１の例は、須恵器の長頸壺ではあるが口頸部の大きな形状で類例は少ない。灰釉陶器広口瓶の形態に近いものだが、在地での須恵器生産の終了時期を考え合わせれば、10世紀前半から中葉までの時間幅のなかで考えられよう。以上のように、火葬蔵骨器は、今のところ８世紀にさかのぼる確実な資料は確認できず、主体は、９世紀で、なかでも９世紀後半の例が多い。10世紀後半以降の例は無い。埋葬地についてみれば、金山東遺跡、吉田川西遺跡の例が集落内に営まれたと考えられる他は、集落から離れた山麓や、古墳群内、斜面上などに営まれている。

奈良・平安時代の墳墓の墳墓としてこのほかに、古墳の造営と石室への埋納がある。伊那谷では中川村六万部古墳、豊丘村家の上古墳などで、確実に８世紀前半まで古墳への追葬が行われており、松本平では、松本市新村安塚古墳群や秋葉原古墳群等で８世紀前半まで、古墳の造営が続けられていたことが知られている。また、古墳の横穴式石室を利用した埋葬が、平安時代をとおして行われていたという指摘もある。

以上の状況をまとめれば、次のようになろう。長野県において、８世紀段階では古墳への埋葬と、土壙墓、火葬墓が存在する。８世紀前半までは古墳の造営が行われ、横穴式石室への追葬も続けられる。土壙墓も存在するが、火葬墓が営まれるようになり、古墳からの過渡的な状況として大久保Ｂ遺跡墳墓例のように、石室に火葬骨を埋納する例もある。しかし、確認できる土壙墓や火葬墓は極めて少なく在地における家父長層の埋葬形態は、古墳が主体であったと考えられる。８世紀後半の段階の様相は明確にはとらえられないが、９世紀の墳墓は、火葬墓と土壙墓によって特徴付けられる。火葬墓は９世紀に入って土器蔵骨器によるものが盛行し、集落から離れた古墳群内や山麓などに営まれることが多い。土壙墓は、９世紀後半に至って平面長方形で多くの副葬品を納める定形的な土壙墓の形態を整える。そしてこの土壙墓は集落内に営まれるのが通例となる。10、11世紀においては、定形的な土壙墓が主体で、火葬墓は少な

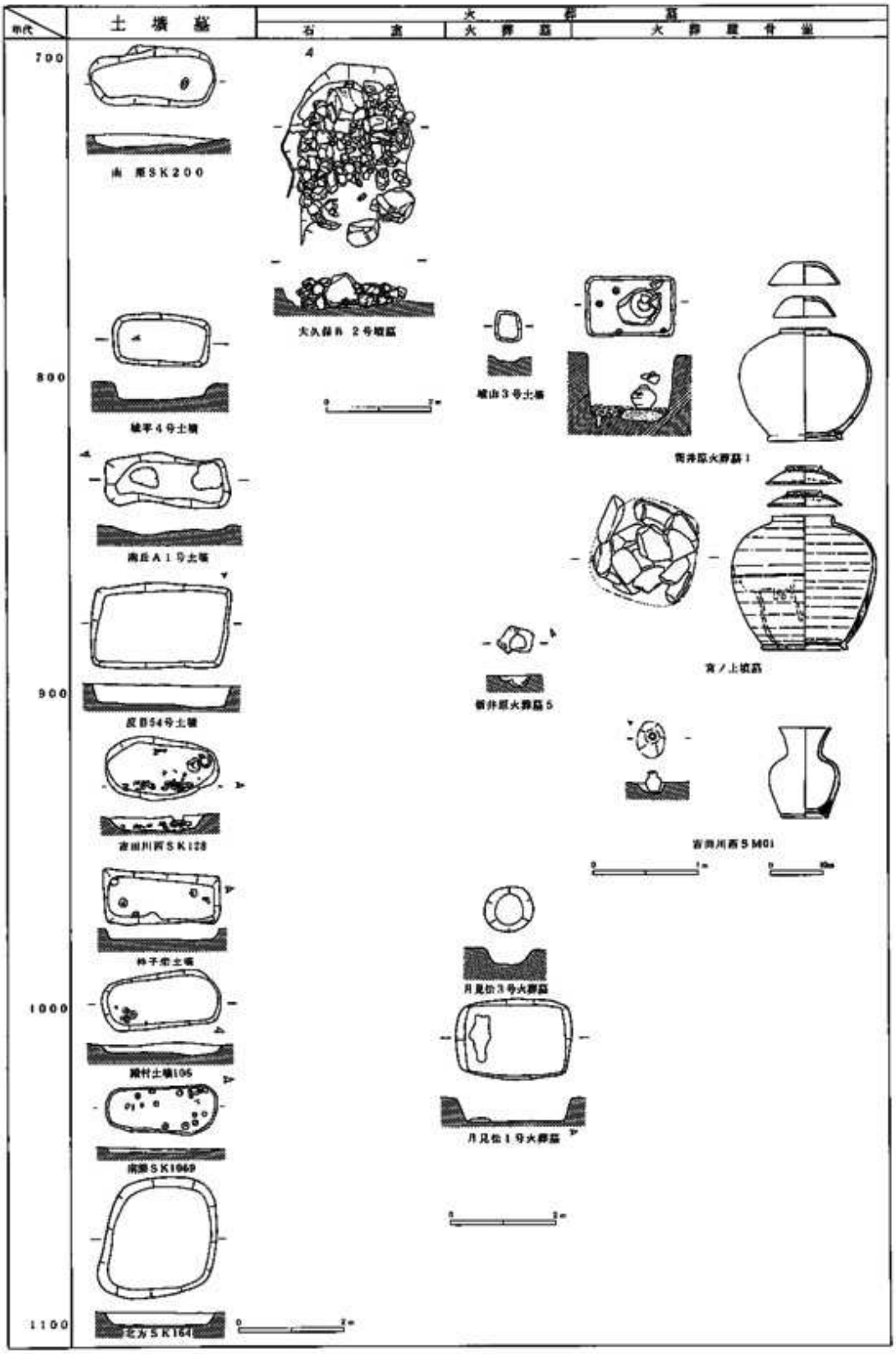
い。集落内に墳墓を設けることは前代とかわらない。

奈良・平安時代においては、おそらく一般民衆墓は簡単な土壙墓として営まれるか、遺体を荒地や川原などに遺棄したものと考えられるから、これまで述べてきた火葬墓あるいは副葬品を伴う土壙墓の被葬者は、それぞれの段階において集落の指導的な役割を担った富裕農民など有力者であったと考えられる。長野県における集落の有力者の墓は、８世紀前半までは古墳への埋葬、９世紀になって土器蔵骨器等による火葬墓が盛行するが９世紀後半をピークに急速に火葬墓は減少し、10世紀以降は多くの副葬品を伴う土壙墓が主体となるというのが大きな流れとして指摘できそうである。これは、時間的なずれはあるものの、黒崎直が指摘する奈良・平安時代の近畿地方の墳墓の状況と対応できそうである。

ところで、奈良・平安時代の火葬墓の普及については、仏教思想の浸透によってもたらされた新しい墳墓形態の導入ととらえられることが多い。しかし、墓制としての火葬の定着をみせなかった状況から見ると、被葬者の仏教への帰依というよりもむしろ中央貴族層の葬制の変化に反応した、集落の新しい指導者の指向という理解のほうが良いのではなかろうか。

９世紀後半と考えられる宮の上火葬墓の被葬者は、先に述べた律令村落崩壊のなかで村の指導者となった富豪層と考えられ、８世紀に中央で盛んに行われた地方にも普及していた火葬墓を自らの墳墓とした。しかしながら、この墳墓が営まれた９世紀後半には、すでに中央では火葬墓は下火になっており、この地方でもさらに新しい墓としての土壙墓が、新しい村の有力者たちの間に広がりつつあったのである。宮の上遺跡の火葬墓は、このような古代の墓制の変換期にあって、一方のあり方を典型的に示す重要な資料といえる。また、歴史的な重要性もさることながら、農作業中の偶然の発見でありながら、その後の措置によって墳墓の構造が記録され、さらに、蔵骨器が優美な姿のまま完形で検出された例としても貴重な資料といえるのである。

本報告書を執筆するにあたり、斎藤孝正氏からは灰釉陶器について指導頂き、桐原　健氏、原　明芳氏からは、奈良・平安時代の墳墓について多くの教示を頂いた。多くの示唆を頂きながら考察にいかせなかったのは筆者の力不足である。お詫びをし、記して感謝したい。本報告が、古代墓制研究の一つの資料に加えられれば幸いである。



第10図　伊那谷における古代の墳墓

引用参考文献

桐原　健　1976　「信濃における平安期土壙墓の性格」『信濃』２８－１

1988　「奈良平安時代の信仰と葬制」『長野県史』考古資料編

黒崎　直　1980　「近畿における８・９世紀の墳墓」『研究論集文Ⅵ』奈良国立文化財研究所

小平　和夫　1990　「古代の集落」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－総論編』

1990　「上伊那における古代土器の編年的考察」『上伊那郷土館研究紀要』第12集

1990　「上伊那における９世紀後半の集落」『上伊那教育』第81号

遠那藤麻呂　1984　「日本各地の墳墓　中部・北陸」新版『仏教考古学講座』第７巻　墳墓

冨永　樹之　1993　「奈良平安時代の墓制」『神奈川県の考古学の問題点とその展望』神奈川県立埋蔵文化財センター

原　明芳　1989　「ＳＫ１２８をめぐる問題」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３－塩尻市内その２－吉田川西遺跡』

1988　「長野県の９世紀後半から12世紀の食膳具の様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』２

藤森　栄一　1941　「奈良時代の火葬骨壷」『古代文化』１２－３

註

(1) 土器蔵骨器による火葬墓については、ここに上げたほかにいくつかの報告がある。今回は、蔵骨器内に焼骨が確認できたものに限ってとりあげてある。

(2) このなかには、有機質の蔵骨器が含まれる可能性がある。

(3) 中南信地方では確認できないが、８世紀前半にさかのぼる例として、素掘りの土坑に焼骨を置き、須恵器の杯、蓋を何枚も重ね覆った例が坂城町豊饒堂遺跡群で確認されている。

第2表　長野県内（中・南信地域）における奈良・平安時代の墳墓

No.	遺跡名	所在地	遺跡名	遺構の形態	出土遺物	立地	同時期の集落との関係	時期	文献
1	新井原	飯田市	火葬墓1	火葬蔵骨器	灰釉陶器短頸壺(1)、黒色土器A杯(1)、須恵器杯(1)	丘陵斜面	集落外古墳群内	9C中	1
2	金山東	岡谷市		火葬蔵骨器	灰釉陶器長頸壺(1) 小瓶(1) 椀(1)、隆平永寶(1)	平坦地	集落内	9C後	2
3	宮の上	南箕輪村		火葬蔵骨器	灰釉陶器短頸壺(1) 皿(2)	段丘斜面	集落外	9C後	本報告
4	知久沢山	箕輪町		火葬蔵骨器	須恵器広口壺(1)	山麓	集落外	9 C	3
5	知久沢山	箕輪町		火葬蔵骨器	須恵器横瓶(1)	山麓	集落外	9 C	3
6	南小河内	箕輪町		火葬蔵骨器	須恵器小型壺(1)	段丘上	不明	9 C	4
7	吉田川西	塩尻市	S M 01	火葬蔵骨器	須恵器長頸壺(1)	平坦地	集落内	10 C	5
8	新井原	飯田市	土坑 16	火葬墓	帯金具	平坦地	集落外古墳群内	9 C	6
9	新井原	飯田市	火葬墓1	火葬墓	灰釉陶器小瓶	丘陵斜面	集落外古墳群内	9C後	6
10	新井原	飯田市	火葬墓3	火葬墓		丘陵斜面	集落外古墳群内	9C後	6
11	新井原	飯田市	火葬墓4	火葬墓		丘陵斜面	集落外古墳群内	9C後	6
12	新井原	飯田市	火葬墓5	火葬墓	灰釉陶器小瓶	丘陵斜面	集落外古墳群内	9C後	6
13	月見松	伊那市	火葬墓1	火葬墓		段丘面上	集落内	11C前	7
14	月見松	伊那市	火葬墓2	火葬墓		段丘面上	集落内	11C前	7
15	月見松	伊那市	火葬墓3	火葬墓		段丘面上	集落内	11C前	7
16	城山	諏訪市	3号土壙	火葬墓	須恵器杯(1)	山麓斜面	集落外	9C前	12
17	金井原	高遠町		土壙墓	黒色土器A杯(5) 皿(1)、鉄鏃(1)、土製印	段丘面上	不明	9C後	8
18	城平	伊那市	4号土壙	土壙墓	須恵器杯(1)	山麓斜面	集落内	9C前	9
19	大境	伊那市	1号土壙	土壙墓	土師器杯(1)	山麓斜面	集落隣接	10C前	9
20	南丘A	伊那市	1号土壙墓	土壙墓	灰釉陶器水瓶(1)	開状地開央	集落隣接	9C中	9
21	神子柴	南箕輪村	土壙墓	土壙墓	灰釉陶器長頸壺(1) 皿(1) 椀(3) 土師器杯(2)	段丘先端	集落外	10C後	10
22	中道	箕輪町	M12号土壙	土壙墓	須恵器杯(1)	平坦地	集落内	8 C	11
23	城山	諏訪市	1号土壙	土壙墓	土師器羽釜(1) 灰釉陶器椀(1)	山麓斜面	集落内	10C前	12
24	城山	諏訪市	2号土壙	土壙墓	土師器杯(2) 灰釉陶器椀(4)	山麓斜面	集落内	10C前	12
25	御狩野	茅野市	土壙1	土壙墓	土師器杯(2) 椀(2) 小型甕(1) 灰釉陶器椀(1) 鉄鏃(3)	台地中央	集落外	10C後	13
26	狐塚	茅野市	1号土壙	土壙墓	土師器杯(30) 盤(4) ミニュミュア甕(1)、灰釉陶器椀(2) 皿(3) 長頸壺(2)、鉄製紡錘車(1)	丘陵上	集落外古墳群内	11C前	14
27	狐塚	茅野市	2号土壙	土壙墓	土師器杯(4) 盤(1)、灰釉陶器椀(1)	丘陵上	集落外古墳群内	11C前	14
28	狐塚	茅野市	3号土壙	土壙墓	土師器杯(6) ミニュミュア甕(1)	丘陵上	集落外古墳群内	11C前	14
29	権現林	茅野市		土壙墓	土師器杯(2)、黒色土器A椀(6)	台地斜面	不明	11C前	14
30	吉田川西	塩尻市	S K 128	土壙墓	緑釉陶器椀(2) 皿(4) 耳皿(1)、灰釉陶器広口瓶(1)、土師器杯(14) 椀(3)、八稜鏡(1)、漆椀、漆箱、	平坦地	集落内	10C中	5
31	菖蒲沢廻跡	塩尻市	墓壙	土壙墓	灰釉陶器椀(2) 皿(1)、ミニュミュア甕(1)、鍔口(1)	山麓	集落外	11C中	15

No.	遺跡名	所在地	遺跡名	遺構の形態	出土遺物	立地	同時期の集落との関係	時期	文献
32	石上	松本市	土壙墓	土壙墓	灰釉陶器長頸壺(1)、黒色土器A杯(12)皿(2)、釘	平坦地	集落内	9C後	16
33	南栗	松本市	SK 200	土壙墓	金環(1)	平坦地	集落内	8C前	17
34	南栗	松本市	SK 176	土壙墓	灰釉陶器椀(2) 段皿(4)、土師器椀(1) 黒色土器A椀(1) 黒色土器B長頸壺(1)、八稜鏡(1)	平坦地	集落内	11C中	17
35	南栗	松本市	SK 193	土壙墓	灰釉陶器段皿(3)、土師器杯(1)	平坦地	集落内	11C中	17
36	南栗	松本市	SK 349	土壙墓	灰釉陶器椀(1)、土師器杯(1)	平坦地	集落内	11C中	17
37	南栗	松本市	SK 514	土壙墓	土師器杯(2) 椀(1) 盤(1)	平坦地	集落内	11C後	17
38	南栗	松本市	SK 1069	土壙墓	灰釉陶器椀(3) 皿(1) 段皿(3)、黒色土器A椀(6)	平坦地	集落内	11C中	17
39	北栗	松本市	SK 43	土壙墓	黒色土器A杯(4) 椀(2)	平坦地	集落内	9C後	18
40	北栗	松本市	SK 50	土壙墓	灰釉陶器椀(1)、土師器杯(2) 盤(1)	平坦地	集落内	11C後	18
41	北方	松本市	SK 164	土壙墓	土師器杯(26) 皿(3) 椀(1)	平坦地	集落内	11C後	19
42	中二子	松本市	SK 4	土壙墓	灰釉陶器椀(1) 皿(1)、土師器杯(3) 椀(1) ミニュミュア壺(1)	平坦地	集落外	10C後	20
43	殿村	山形村	土壙 106	土壙墓	灰釉陶器椀(1)、土師器杯(4)	平坦地	集落隣接	11C前	21
44	殿村	山形村	土壙 27	土壙墓	灰釉陶器短頸壺(1)	平坦地	集落内	9C後	21
45	反目	駒ケ根市	54号土壙	土壙墓	灰釉陶器椀(1) 皿(1) 小瓶(1)	段丘面上	集落内	9C後	22
46	大久保B	岡谷市	1号墳墓	石室		山麓	集落外	8C	23
47	大久保・B	岡谷市	2号墳墓	石室	八花鏡(1)	山麓	集落外	8C	23
48	大洞	岡谷市	1号石組墓	石組墓		山麓	集落外		22
49	静畑B	岡谷市	1号石組墓	石組墓	須恵器長頸壺	山麓	集落外	9C前	24
50	城山	松本市		合口甕棺墓	土師器甕(2)		不明	9C中	24
51	富士電気敷地	松本市		合口甕棺墓	土師器甕(2)	平坦地	不明	9C中	24

一覧表引用文献

1 座光寺村史編纂委員会 1993 『座光寺村史』

2 藤森栄一 1930 「隆平永宝を伴出せる蔵骨器」『考古学』1－2

3 上伊那誌編纂会 1965 『上伊那誌』 第2巻歴史編

4 箕輪町 19 『箕輪町誌』

5 長野県教育委員会 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 －塩尻市内その2－吉田川西遺跡』

6 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』

7 長野県教育委員会 1974 『昭和48年度長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－伊那市内その2－』

8 高遠町 1983 『高遠町誌』 上巻歴史1

9 長野県教育委員会 1973 『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－伊那市西春近－』

10 南箕輪村教育委員会 1969 『神子柴遺跡緊急発掘調査報告書(第3次発掘調査)』

11 長野県教育委員会 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－上伊那郡箕輪町－』

12 長野県教育委員会 1974 『昭和48年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市内その1・その2－』

13 長野県教育委員会 1976 『昭和50年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その1・富士見町その2－』

14 茅野市 1986 『茅野市史』上巻

15 塩尻市教育委員会 1991 『菖蒲沢窯跡』

16 松本市教育委員会 1991 『薄町・石上・鎌田遺跡』

17 長野県教育委員会 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7 －松本市内その4－南栗遺跡』

18 長野県教育委員会 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8 －松本市内その5－北栗遺跡』

19 長野県教育委員会 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書10 －松本市内その7・豊科町内－南中・北中・北方・上手木戸遺跡』

20 長野県教育委員会 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書5 －松本市内その2－神戸・上二子・中二子遺跡』

21 山形村教育委員会 1987 『殿村遺跡』

22 駒ケ根市教育委員会 1990 『反目・遊光・殿村・小林遺跡』

23 長野県教育委員会 1987 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1 －岡谷市内－』

24 桐原 健 1955 「松本市筑摩出土の火葬骨壷」『信濃』7－4

図　　版

図版1

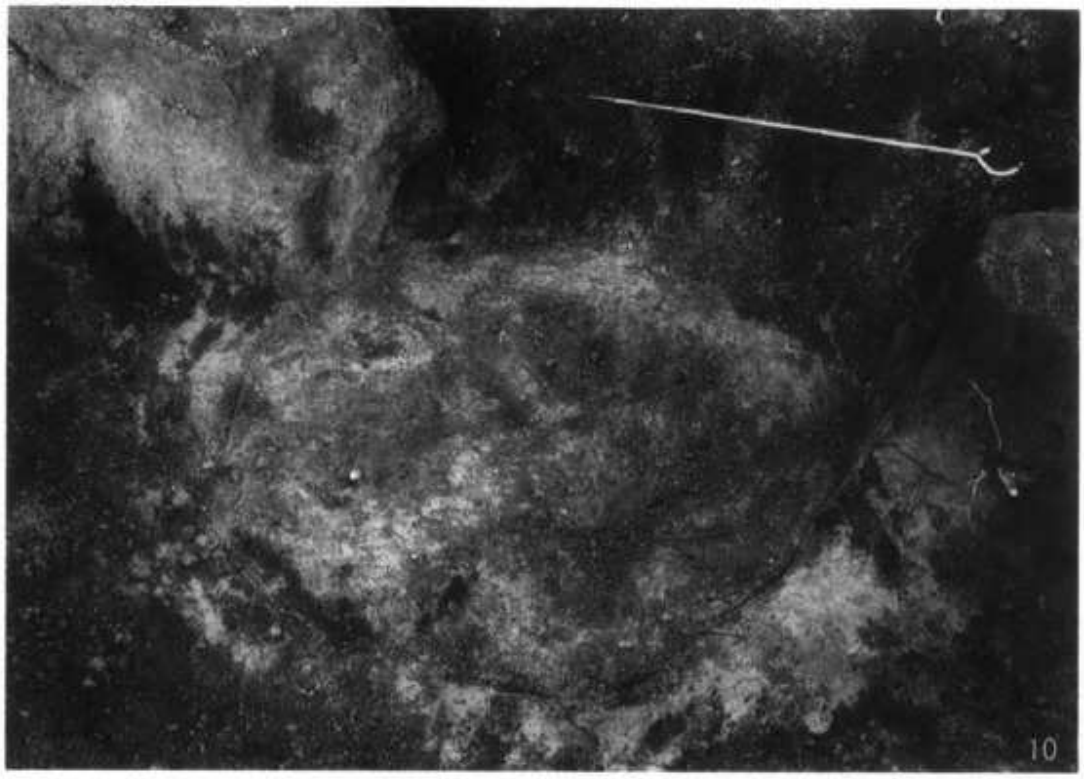
1．調査地遠景（南方より）　2．調査地近景（北方より）

3．遺構上部配石状況　4．石組み状況

5．蔵骨器埋設状況１　6．蔵骨器埋設状況２

7．蔵骨器埋設状況３　8．蔵骨器埋設状況４

図版5



9．遺構底部配石状況　10．掘り形底面状況

11. 灰釉陶器頸頸壺　12. 灰釉陶器皿1　13. 灰釉陶器皿2

図版7

14. 蔵骨器埋納骨（一部）

宮の上墳墓

宮の上遺跡発掘調査報告書

１９９４年２月　印刷
１９９４年２月　発行

発行所　長野県南箕輪村教育委員会
印刷所　伊那市 ㈱小松総合印刷所